

定性評価の状況（令和 2 年度）

評価指標 5	展覧会に対する外部評価
--------	-------------

【開校 100 年 きたれ、バウハウス展】（参加型企画展）

注：本展の評価にあたっては、開催期間中の新型コロナウイルス感染症蔓延状況に鑑み、委員の招集を回避し図録のみによる評価とした。

（潮江委員）

総評：

各世代の研究者たちが執筆した日本のバウハウス研究の集大成とも言うべき、読み応えのある図録だということができる。これだけ多くの研究者が集ったことだけでも、素晴らしいとしか言いようがない。グロピウスの「バウ」の概念がしっかり論じられているだけでなく、資料的には多少物足りないが、各工房の方向性と教育成果が具体的に引き上げられ、「学校としてのバウハウス」という中心的な課題が論じられており、鑑賞者への普及・啓発に寄与することは言うまでもない。特筆すべきは、バウハウス本体だけでなく、バウハウスに学んだ複数の日本人学生について論じられているだけでなく、日本におけるバウハウス教育の実践例も引き上げられ、そこには先駆的で独自の内容も含まれており、開校 100 年を記念するにふさわしい、広がりを感じさせる編集姿勢に敬意を表したい。

ただ、あまりに多くの執筆者で、しかもバウハウス研究という面で同じ方向を向いた執筆姿勢であるためか、多少の波の変化はあっても、同じ方向への波動が繰り返されているように感じられ、それがもたらす単調な印象が最後まで拭えなかったことも確かである。正直なところ、「バウハウス—普遍性と全体への渴望・あるいは新たな貧困—」と題した柏木博論文がなければ、老人には辛い字体の小ささもあり、窒息していたかも知れない。

今後の課題：

バウハウス 100 年、確かにアカデミー教育に代わる新たな教育形態を提示し、師匠と弟子という古くさい関係を解き放ったことの意義は大きい。100 年前のドイツに思いを致し、そこからの足跡を辿って解き明かしていく作業は、どれだけ繰り返されても意義があるほどの大きな変化だったと思う。しかし、現在の美術教育の現場では、バウハウス由来の重要な用語、「素材」はまだ辛うじて生きているが、「造形」の方は用いられてなくなって 30 年は経つ。わたし自身の体験からしても、少なくとも 1990 年代にかかるころからこの言葉を使って美大生に話をすることはとても気恥ずかしくなった。また、「バウ」概念の根幹たる建築も、そこにかつてはモニュメントや壁画を伴っていた建築も次々と取り壊されて、今日では、わずかの例外を除けば、竣工から 30 年ほど経てば、まるで普通の消費物品のように、完全にリニューアルされることが普通になった。こうした変化にまで至って、「バウ」を中心とした総合芸術といった実体はどこに成り立つ可能性があるのだろうか。そうした現実を踏まえれば、研究と評価の視点を変えていく必要もあるのではないだろうか。例えば、バウハウスを論じるのにその背景にある「抽象絵画」を産み出した地域としての中部ヨーロッパ、未来派やロシア・アヴァンギャルドとも通底する時代としての 1910 年代から 20 年代、をしっかりと踏まえて、地域性、時代性、特殊性の観点からさらに掘り下げてバウハウスを見つめ直す時期が来ているのではないか。生誕 100 年のお祝いはいかにしても、「バウハウス神話」は、果たして今後も生き延びるものだろうか。

(山梨委員)

総評：

バウハウスに関するこれまでの研究、ミサワホームをはじめとするコレクションをよく反映された展覧会であるが、同校のあり方には時代背景が大きく関与しており、図録の論考が鑑賞者の理解を助けるところが大きいと思われる。

本展は、「バウハウス展」(1971年2月 国立近代美術館)、「バウハウス展ーガラスのユートピア」(2000年3月 宇都宮美術館)などの構成を踏襲しており、諸芸術を建築の中に統合しようとしたバウハウスの教育(指導者とその教育を受けた学生の作品)を紹介し、その教育がバウハウスで学んだ美術家たちにどのように受容されたかが豊富な作品・資料によって紹介されているが、同校で学んだ水谷武彦、山脇巖・道子、大野玉枝に関して従来よりも重きが置かれている。大野の紹介はこのたび新たに行われており、意義深い。また、大阪市立工芸学校におけるバウハウス教育の受容について具体的に明らかにする論考は、東京以外の地域でのバウハウスからの影響へと目を開くとともに、今後の調査の広がりにも資するものである。

今後の課題：

図録の論考にもあるように、バウハウスは諸芸術を建築に統合することを目指した造形学校であったが、日本建築史においては建築の近代化にとってル・コルビジエの影響が大きく取り上げられ、建築分野でのバウハウスの受容があまり語られていない。むしろ、クレイ、カンディンスキー、モホイ・ナギのようにバウハウスで教鞭をとった画家、写真家から日本の美術家たちが受容したものについて調査研究がなされてきている。今後は、日本の建築分野でバウハウスでの教育がどのように展開されたのかをさらに明らかにすることが望まれる。

また、バウハウス創立100周年に際してドイツで設立された記念事業「Bauhaus100」のプログラムのひとつである国際プロジェクト「bauhaus imaginista」では、バウハウスを顕彰するため、「バウハウスとマニフェスト」「パウル・クレイの素描作品《カーペット》」「マルセル・ブロイヤーによる椅子とそのデザイン過程」をバウハウスの理念と実践を考えるための3つのカギになるアイテムと位置づけ、世界におけるその受容と展開を「Correspondence With (応答)」

「Learning From (学習)」「Moving Away (展開)」と題した3章で検証してウェブ公開している。同サイトには中国、アメリカ、北朝鮮などのバウハウスとの関わりを示す論考が掲載されており、バウハウスの教育が各地域に異なる形で受容されたことがわかる。そうした国際比較も今後のひとつの視点になる。

機械文明の発達の中で手仕事をどう位置付けるかという点において、アーツ・アンド・クラフツ運動とを比較してみる視点も興味深い。

【パラレル・ヒストリーズ展】(自主企画展)

(潮江委員)

総評：

今回の現代美術の展覧会、「パラレル・ヒストリーズ」展は、ともするとある一つの運動や傾向が生起して収束するという形での美術の歴史の提示という方法ではなく、現代美術のキー・コンセプトを六つにまとめて文字通りパラレルに呈示して、観者に現代美術についての包括的な視点を喚起するべく仕組まれた、創意工夫を感じさせる展覧会になっている。もとより館独自のコレクションという限られた資源の中で包括的な視点を喚起する展示を構成することには困難があっ

たと推察されるが、その問題点を一定以上の効果が期待される形で克服していることは、高く評価できる。というよりも、これもまた、静岡県立美術館のこれまでの収集活動の努力とその成果があったればこそと、改めて感心した。海外作品と日本の作品が混在していることも、新たな視点を触発させる、という意義と持ったと思う。歴史の「流れ」ではなく、広い視野で見た「現代美術」への転換は、鑑賞者には、予定調和的納得へと導かなかったかも知れないが、一時的な混乱からもたらされる新たな視点の形成へと向かうきっかけにはなったと思う。

今後の課題：

今後のさらなる収集活動によって、ここで呈示したキー・コンセプトに最適の作品を充実させ、また、新たなキー・コンセプトを追加して、それらの下に現代美術の多様性が語られるようになることが望まれる。

(山梨委員)

総評：

現代アートをどのように定義し、分類するかは、対象が現在進行形であることもあって、大変困難な問題である。本展覧会で設定された「絵画という難問」「空間とのかかわり」「地面と重力」「アートの断捨離」「見ることの不思議」「テクノロジー」という6つの観点は、作家のアイデアが反映された物質を人の眼で見ることによって成り立つ造形芸術というものの基本を再確認させるものであった。

展示を「絵画という難問」という章から始め、冒頭に吉原治郎の「work」(1959年)と齋藤義重「作品2」(1960年)の作品を配置し、その後、草間彌生、磯部行幸、李禹煥とゆるやかに編年的に作品が展示されており、人間が古くから親しんできた絵画という分野で、本展覧会が対象とする時代に起こったことを鑑賞者が認識できるよう配慮され、わかりやすい導入となっていた。関根信夫の「位相―大地」が展示されている第2の観点「空間とのかかわり」から、宮島達夫の「Life(complex system)」を含む第6の観点「テクノロジー」まで、次第に人間の身体性が直接に感じられない作品に向かっている現代美術の傾向を作品から体感できる構成になっていた。

グループ「幻触」の作品のほか、静岡ゆかりの作家の作品が多数出品され、日本後美術と静岡とのかかわりが追えるように構成されていたことも意義深い。地元の方々が、日本の現代美術を身近に感じる契機となったのではなかろうか。また、静岡県立美術館が地元静岡の美術活動を積極的に調査し作品を収集してきたことも伝わったはずである。

展示作品の形式、様式が多様である一方で、出品作の色調が白、黒、赤を基調として統一感を持っており、会場全体に色彩的なまとまりがあった。

展示された作品はどれも大変質が高く、現在では公立美術館の予算で購入がかなわないほどの市場価値をもつと予想されるものが多数ある。静岡県立美術館が歴史的な観点を踏まえて現代美術の動向を追い、収集を続けてきたことをよく示す展覧会であった。

今後の課題：

この度の展覧会では、戦後の社会や技術の変化に作家がどう対峙したかよりも、現在の鑑賞者が作品とどのように向き合うかに重点が置かれているが、会場パネルにもあったように、現代美術は多様であり、本展で設定された6つの観点のほかにもいくつか観点を設定することができよう。

異なる切り口でのコレクション展も試みることで、現代美術に親しむ契機を積極的に作っていただきたい。

引き続き、静岡の戦後美術の調査研究を進めるとともに、現代美術作品の収集をしていただけるよう期待している。「現代アート」の定義についても検討を続けることが、よい作品の収集の一助となると考える。

評価指標 9	調査研究に対する外部評価
--------	--------------

① 研究紀要 南美幸「マルキ・ド・サド『イタリア紀行』ナポリ編について—エルコラネンセ美術館の記述を中心にした翻訳と解題」

(潮江委員)

総評：

本翻訳の試みは、真面目一辺倒にも見える新古典主義運動の靈感源となったヘルクラネウムとポンペイからの発掘品について、あのサドが大きな関心を抱き、しかもそれを検分し、その意義について語っている、そのことは、教養人サドの証として、彼自身に対する見方や評価にいささかなりとも変更を迫るだけでなく、この両遺跡の発掘が同時代に対して有していた衝撃の幅の広さを改めて考えさせるものになっている。

今後の課題：

今回の論考では、どちらかという、フランス中心に事柄が語られているが、ドイツ人にも、イギリス人にも、この古代ブームに敏感に反応した人々があり、時間的かつ地域的な観点から、それらとの関係は、どのようなものであったかさらに調査解明していただければと思う。また、これはたんなる思いつきにしか過ぎないが、どっぷりロココ文化だったヴェネツィアに、アントニオ・カノーヴァが登場したこととサドの古典的教養とが触れあうことがあったのか、などと空想させるところがある。

(栗田委員)

総評：

「古代への情熱—18世紀イタリア・考古学と芸術の出会い」展（2019）実施の延長上にあると思われる研究テーマである。論考内に予告されている本格的な考察研究の準備段階として基礎資料を翻訳・紹介しておくことは、次なる研究の水準を高めるのに役に立つので、こうした基礎作業は大いに評価できるとともに、次なる論考の成果が大いに期待できる。

今後の課題：

サドの『イタリア紀行』の意義を評価するためにも学術誌等における書評への目配せも怠らないようにしたい。例えば、ある書評では（Ehrard Jean. D. A. F. marquis de Sade : *Voyage d'Italie*, vol. I : Édition établie et présentée par Maurice Lever. 1995 ; vol. II : Dessins de Jean-Baptiste Tierce. Choix des œuvres et des légendes par Maurice Lever. Notice sur Tierce par Olivier Michel. Idem. In: *Dix-huitième Siècle*, n°28, 1996. L'Orient, pp. 583-584. www.persee.fr/doc/dhs_0070-6760_1996_num_28_1_2139_1_0583_0000_5）、本論文の文献表にはない学位論文の存在等の情報がいくつか指摘されている：la thèse de doctorat de Georges Festa, *Marquis de Sade, Voyage en Italie (1775-76). Édition critique* (4 vol., Clermont-Ferrand, Université Blaise-Pascal, 1991).

12頁の注27に「王室造営物局総監」とあるが、*directeur général des Bâtiments du roi* の訳語であろうか。*Bâtiments du roi* は通常王室建造物局と訳されるので、訳語選択の基準に補足が必要であろう。同職は、ルイ14世治下は *Surintendant des Bâtiments* と呼称され、ルイ15世治下以降 *Directeur général des Bâtiments du roi* と呼称された。区別するには、前者を王室建造物局総監、王室建築総監、後者を王室建造物局長官、王室建築局長官とすることも可能であろう。

② 研究紀要 川谷承子「高松次郎「布の弛み」に関する考察」

(潮江委員)

総評：

全体として、静岡県立美術館所蔵の高松次郎の「布の弛み」が、いかに時代を両する作品であるかを複数の観点から証明した充実した研究成果となっている。

今後の課題：

「発注芸術」に着目したのは興味深いが、物質の語らせ方について、ミニマリズムと「もの派的思考」の微妙な差異についてももう少し考察を深めると、「布の弛み」もさらに見えてくるのではないかと思う。また、弛んだ布が重力で垂れる展示方法と、形状が展示者によって選択できるケースとの差異について、作者はどのように考えていたのだろうか、という疑問は残っている。

(山梨委員)

総評：

自館の所蔵作品である高松次郎「布の弛み」について、複数ある「布の弛み」の中で、当該作品が第6回パリ青年ビエンナーレ出品作であることを明らかにし、また、静岡県立美術館での展示の際に作家自身が展示指導した方法について資料を公開した点で、本稿は高い資料性を持っている。

本稿の筆者川谷氏は、静岡の戦後美術で1960年代後半から70年代初頭に注目すべき活動をしたグループ「幻触」について調査研究を進め、2014年に展覧会を開催している。本稿は、その成果を踏まえて、同グループと同時代に活躍し、影響力の大きかった高松次郎が1969年に制作した「布の弛み」について考察したもので、これまでの調査の蓄積に裏付けられている。

「高松次郎 制作の軌跡」(国立国際美術館 2015年4月)「高松次郎 ミステリーズ」(東京国立近代美術館 2014年12月)などにより国内での高松に関する言説が一段落する一方で、海外での「もの派」、「具体」などへの関心の高まりと調査研究成果により新たな視点での、高松評価がなされ始めている現状において、本稿は、「布の弛み」の基礎データを整理し、作品を論ずるいくつかの視点を提示しており、今後の調査研究に資するものである。

今後の課題：

著者自身が本稿の結びで記しているように、国立国際美術館、東京国立近代美術館で2014、15年に開催された高松次郎に関する基礎研究が一段落し、また「「もの派」再考」(国立国際美術館2005年)や海外での「もの派」や「具体」についての展覧会や研究成果などによって「もの派」に関する言説があらたな局面を迎えようとしており、今後、それらを踏まえた再解釈がなされることが期待される。本稿での基礎データ確認とこの作品を見るいくつかの視点の整理をもとに、これまでの川谷氏の調査研究の蓄積を活かした考察がなされることを期待する。たとえば高松とグループ「幻触」、「トリックス&ヴィジョン」展との関係などについても、関係者が期待するところと思う。

(西洋)

3点の作品を「クールベと海 フランス近代 自然へのまなざし」展に貸し出した。同展は、19世紀レアリスムの画家の足跡を、同時代やその前後の世代の芸術家の作品も交えつつ、海景画を中心に、故郷を描いた風景画や狩猟画等によって辿るものである。当館からは、クールベ以前に畏怖の対象としての海を描いたクロード＝ジョゼフ・ヴェルネの《嵐の海》、19世紀前半の理想的風景画であるアシル＝エトナ・ミシャロンの《廃墟となった墓を見つめる羊飼ひ》、自然の中の野生動物を表した彫刻としてアントワーヌ＝ルイ・バリーの《ライオンと蛇》が紹介された。

【上席学芸員・南美幸】

(日本画)

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大により、緊急事態宣言が発出されたため、貸出したものの内覧会のみ展示、貸出のみの作品が複数あった。そのなかで、竹内栖鳳《揚州城外》、人江波光《草園の朝》を兵庫県立美術館で開催された「超・名品」展に貸出し、展示された。また、京都市京セラ美術館開館記念展の「京都の美術 250年の夢—江戸から現代へ—」展に徳岡神泉《雨》を貸出した。東京都美術館の「読み、味わう昭和の書」展には、森田安次の作品2点《風の又三郎》、《水》を貸出した。

【上席学芸員・野田麻美】

(現代)

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大により、緊急事態宣言が発出されたため、現代作品の貸出は、無かった。

【上席学芸員・川谷承子】

(日本洋画)

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大により、緊急事態宣言が発出されたため、日本洋画の貸出は、無かった。

【上席学芸員・泰井良】

< 一般向け >

全国緊急事態宣言のため、4月から5月の実技室プログラムは中止することになった。6月から消毒や換気、参加者の人数制限等の対策をとりながらプログラムをすべてではないが再開することができた。

「みんなにミュシャ」展関連では、版画家の柳本一英氏に講師をお願いし、リトグラフの講座を実施した。新型コロナウイルス感染症拡大予防対策として、展示室での解説をやめ、別室にてミュシャが活躍した時代やリトグラフの上房について、担当学芸員と講師の対談形式での話を聴講後、作品鑑賞をすることとした。鑑賞後、作品の一部を模写する制作を通して、ミュシャ作品の線の細やかさ構図の巧みさを感じることができる講座となった。

切り絵作家福井利佐氏に講師依頼した講座では、福井氏が東京在住で来館することができなかつたため、美術館実技室にいる参加者と講師をオンラインで結び、制作活動を行った。ネット環境の整備や講座の段取り等、課題もあったが、今後に活きる講座となった。

コロナ禍で準備を進めていたが、中止を余儀なくされたプログラムもあった。しかし、制限された中でも対策をとりながら展覧会と関連させた内容の普及活動をバランスよく行い、展示と鑑賞を結びつけた静岡県立美術館ならではの教育普及活動を展開することができた。

< 学校向け >

例年行われていた県総合教育センターや各地区の図工美術会の教員向け鑑賞教育研修が新型コロナウイルス感染症拡大予防のため中止となってしまった。また、校外学習の一環で「美術館の秘密を探れ」や「ロダン館ななふしぎ」を例年希望する学校が、今年度は取りやめになり、学校現場では一斉休校を経て学校再開に向け安全対策や授業時数の確保等、課題が多い様子であった。

一方で、修学旅行等の代替案として県内旅行にした学校が来館し、初めてプログラムを活用するという事例が複数あった。

今後は、新しい生活様式に対応した普及・教育プログラムの教材開発・提供の必要性が高まり、対応が急がれる。

これまでの地域等の連携をさらに深め、地域をパートナーと考える経営を推進した。

地域・企業等

- (1) 開館以来、活動を続けている県立美術館ボランティアは活動任期が3年であり、平成30年度末に任期が切れたため、新ボランティアの募集を行い、136名を採用した。
 - ・活動期間（任期）：平成31年4月1日～令和4年3月31日（3年間）
 - ・活動方針：「来館者サービスの充実、美術館運営支援、地域連携推進」
- (2) 有度山地域に立地する5施設、県立美術館、SPAC、日本平ホテル、日本平動物園久能山東照宮による「有度山フレンドシップ協定」による協働。
 - ・コロナ禍の中、今後、企画展との連携事業を検討していく。
- (3) 草薙商店会等との協働
 - ・草薙商店会主催の「つながるくさなぎ」夏フェス、冬フェスにて毎年実技体験を実施していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止になった。
 - ・草薙地域で活動しているグループと連携して美術館前の広場でロダン・ウィーク「丘の上のマルシェ」を毎年開催していたが、今年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止になった。
- (5) ロダン・ウィーク

平成26年度、開館20周年を契機に開始した「ロダン・ウィーク」。その第7回を10月31日（土）から3日（火・振）の間、開催した。

 - ・草薙商店会との協働による「丘の上のロダンマルシェ」は中止になったが、ロダン賞コンサート、めぐりアート静岡の展示、友の会主催の消しゴム、スタンプ作り、万華鏡作り、にが絵等のワークショップを実施した。
 - ・「ロダン・ウィーク」期間中は、ロダン館・収蔵品展の入館料を減免し、無料観覧による誘客
 - ・ロダンやその作品に関するクイズラリーを実施し、クイズにお答えいただいた方に、先着で、オリジナル缶バッジをプレゼント
 - ・4日間で1,666人がイベントに参加した。
- (6) 企画展における企業等との連携による効果
 - ・「みんなのミュシャ」展では新静岡セノバの協力でセノバ館内に大々的に広報を実施
 - ・「富野由悠季の世界」展では、館内レストラン「ロダンテラス」で特別メニューとして「赤い彗星のレッドカレー」を提供した。

ムセイオン静岡

谷田地域の文化教育7機関（県立大学、美術館、中央図書館、埋蔵文化財センター、SPAC、グランシップ、ふじのくに地球環境史ミュージアム）が多分野における連携を進め、更なる文化の情報発信を目指した。

- (1) 「ふじのくに文化の丘フェスタ」の実施

ムセイオン7施設を巡るスタンプラリー
令和2年10月24日（土）から11月8日（日）まで実施した。
- (2) ムセイオン静岡協働イベント「岡村昭彦の知の世界」実施

期間：令和2年10月26日（月）～令和2年11月25日（水）
参加施設：静岡県立附属図書館、静岡県立中央図書館、静岡県立美術館
当館では、県民ギャラリーにおいて岡村昭彦写真展「岡村昭彦の写真にみる生と死、いのちをつなぐたべもの」（令和2年10月27日（火）～令和2年11月8日（日））を開催

昨年度に引き続き、様々な広報手段を活用し、県内外への広報を推進した。
企画展の共催者・協賛者等と協働した広域的な広報を目指した。

広報活動

- ①ホームページ、フェイスブック、インスタグラム、ツイッター、YouTube による情報発信
- ②展覧会等イベント情報のマスコミへの資料提供
- ③ポスター、チラシの配布、駅貼り、車内吊り
- ④県公聴広報課との連携（県民だより、県政番組、ラジオ番組出演）
- ⑤広報サポーターへの情報提供
- ⑥展覧会共催者（新聞社・テレビ局）、協賛者等との連携
- ⑦共催者が企画する講演会・イベントを館内で行い集客を図った。
- ⑧美術館ニュース「アマリリス」の発行
- ⑨インターネットミュージアム等の美術館・博物館情報サイトで展覧会をPRした。

県有文化施設と協働した広報

- ①「ふじのくに文化の丘フェスタ 2020」文化の丘スタンプラリーに参加
- ② ムセイオン静岡協働イベント「岡村昭彦の知の世界」実施
- ③「めぐりアート静岡」への参加

新たな取組

- ①「みんなのミュシャ」と「ムーミン展」では、平日に展覧会ポスター（非売品）のプレゼント企画を実施して集客を図った。
- ② 公式 YouTube チャンネルを開設して、紙芝居「カレーの市民」、ロダン体操など動画配信を行った。